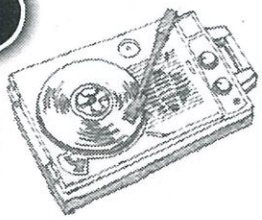
週刊ポスト日 2019.2.18(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦



第67回 GSの人気作詞家が定着させた「男に尽くす女性像」

歌手・いしだあゆみのヒット曲といえば、オリコン1位を獲得し150万枚を売ったとされる『ブルー・ライト・ヨコハマ』、オリコン上位を記録した『涙の中を歩いてる』『喧嘩のあとでくちづけを』『あなたならどうする』あたりの歌が思い浮かぶことでしょう。

ヒット曲だけの印象からすると、彼女の歌手人生のピークは昭和46年5月発売の『砂漠のような東京で』あたりのように思われますが、彼女のコロムビア在籍時のシングル盤をいま通して聴くと、ヒット曲でなくても佳曲が多く、歌謡曲三昧だった学生時代の私が、『月刊明星』付録の歌本で彼女の新曲を必ずチェックしていた理由も納得できます。

昭和43年発売の『太陽は泣いている』から同50年までの8年間、ほぼ年間シングル3枚のペースで新曲がリリースされましたが、A面24曲のうち、作詞は橋本淳（11曲）となかにし礼（9曲）で8割方占められていました。

昭和42年から爆発的なブームとなったGSの「貴公子の恋物語」を仕掛けた二人の作詞家が、男女の立場を逆転し「大人の女性の恋物語」をいしだに歌わせます。

育ちの良さと繊細さが感じとれる笑顔と、か弱さを印象づけるような細い声質が相まって、「身も心も男に尽くす女性像」がいしだの実像と重なって見えますが、それは橋本となかにしが「いしだ像」として定着させようとした「時代に愛される女性像」だったのでしょう。女心を率直に歌う中島みゆきも荒井由実も、まだ世に知られる前の時代でした。

今からちょうど半世紀前の昭和44年2月、私が高校2年生だった頃、番組が始まってまだ日も浅かったフジテレビ系『夜のヒットスタジオ』に『ブルー・ライト～』がヒット中のいしだが出演。番組の目玉コーナー「コンピューター恋人選び」の当事者に指名され、「恋人」に選出されたのが一緒に出演中の森進一と告げられると、その直後の『ブルー・ライト～』が涙で歌えずにいた映像が甦ります。

いま思えば、少々あざとい企画なような気がしますが、人気歌手が泣いてしまうという生放送のリアルさにドキッとさせられ、いしだの純情さにほろりとしたものでした。

歌手・いしだの魅力の一つに、『太陽は泣いている』から早くも確認できる「シンコペーション（簡単に述べると、リズムをずらしてほんの少し早く歌い出すこと）」が自然に出てしまうような「前のめり躍動唱法」があります。

旋律は和風でも作品としてポップスの香りが漂ってくるのは、半数以上の作編曲を担当した筒美京平や森岡賢一郎の洋風アレンジの力だけでなく、歌手としてのいしだの魅力との相乗効果があったからだと思います。

『ブルー・ライト～』でレコード大賞作曲賞を初めて受賞した筒美が、彼女を介して理想の和製ポップスへと試行錯誤し続ける足跡は「昭和歌謡の音の変遷」でもありました。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中